

看護師が捉えた看護学教育における小児看護技術

Pediatric Nursing Techniques in the Nursing Education from the View of Nurses

西山 智春, 大室 律子*, 鈴木 良子**, 合田 典子***

* 千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター

** 神奈川県立綾瀬西高等学校

*** 岡山大学医学部保健学科

要 約

本研究の目的は、臨床の看護師が看護基礎教育において卒業前と卒業後に必要と捉える小児看護技術項目を明らかにすることである。3病院の小児病棟に勤務する看護師を対象に、卒業前（講義・演習・実習）及び卒業後に習得すべき看護技術項目について無記名による質問紙調査を行った。配布は対象病棟ごとに、回収は個別による郵送法で、43名（回収率89.6%）による回答が得られた。その結果、臨床看護師は卒業前に習得すべき技術項目として「安全」・「遊び」・「観察」を重要項目とし、「輸液療法」や「救急」など高度な技術を要する診療補助技術は、卒後教育での学習でよいと捉えていることが明らかとなった。

キーワード：看護師，看護学教育，小児看護技術

はじめに

近年、看護師の就職時の臨床実践能力が不足¹⁾しているとの指摘される中、平成15年3月に「看護基礎教育における看護技術の在り方に関する報告書」²⁾が厚生労働省から提出され、看護実践能力を育成するための方向性が示されている。

臨地実習は看護実践能力育成においてきわめて重要な意味をもっている。しかし、現在の小児看護学実習を展開する医療現場は、少子化による入院数や在院日数の減少のほか、実習に対する同意、家族の付き添い、医療における安全確保など、患者の権利擁護の視点から看護学生が経験できる看護技術に限られる傾向がある。こうした中で、臨床の看護師は卒前の小児看護学の講義・演習・実習で習得すべき看護技術として何を求めているのかを把握することは、技術教育内容を再考する上での重要な基礎資料となる。

そこで、基礎看護教育において、卒前・卒後に習得すべき小児看護技術について、臨床看護師がどのように捉えているのか調査を行った。

研究目的

臨床看護師が卒前と卒後に必要と捉える小児看護技術項目を明らかにし、基礎看護教育における小児看護技術の教育内容を検討するための基礎資料とする。

研究方法

1. 調査対象：A看護短期大学（3年課程）の3実習病院の小児病棟に勤務する看護師48名。A病棟18名、B病棟24名、C病棟6名。乳幼児の家族付き添い率は全病棟とも約100%。
2. 調査方法：小児病棟師長に研究協力の承諾を得た後、看護師に対して調査についての説明を行い、承諾の得られた看護師に依頼状と質問紙・返信用封筒を配布、看護師各自が厳封し、郵送にて返送。回収率89.6%（43名）。
3. 調査期間：2003年10月～11月。
4. 調査内容：1) 対象者の背景、2) 調査項目はA校の実習要項と文献を参考に小児看護技術81項目を精選し、項目ごとに卒前（講義・学内演習・臨床実習）と卒後どちらで習得すべきかについて調査した。
5. 倫理的配慮：研究の主旨及び調査に対する対象者

に自由意志の尊重・プライバシーの保護について口頭・文書にて説明し、同意を得た看護師に無記名で回答を求め、個人が特定できないよう配慮した。

6. 分析方法：エクセル統計とSPSS統計ソフトを使用し統計処理をした。70%を超える項目を教育の必要性の高い技術とした。

表1 調査対象の背景

n = 43

項目		人数	%
性別	女性	43	100.0
年齢	20 歳代	21	48.8
	30 歳代	11	25.6
	40 歳以上	8	18.6
	無回答	3	7.0
			100%

表2 調査対象の教育的背景

n = 43

項目		人数	%
専門学歴	短大	12	27.9
	専門学校	29	67.4
	各種学校	1	2.3
	無回答	1	2.3
教育課程	2 年課程	11	25.6
	3 年課程	31	72.1
	無回答	1	2.3
			100%

表3 調査対象の臨床経験

n = 43

項目		人数	%
臨床経験 (通算)	5 年未満	17	39.5
	5 年以上 10 年未満	9	20.9
	10 年以上	16	37.3
	無回答	1	2.3
小児看護 臨床経験	5 年未満	31	72.1
	5 年以上 10 年未満	9	20.9
	10 年以上	2	4.7
	無回答	1	2.3
			100%

結 果

対象者の背景は表1～3のとおり、小児臨床経験年数は5年未満が31名、5年以上は12名であった。年齢別では20歳代21名（48.8%）、30歳以上22名（51.2%）であった。

1. 臨床看護師が卒業前に必要と捉えた小児看護技術

項目（表4）

1) 卒前に小児看護学の講義で学習してほしい項目で70%を越えた項目数は3項目で、「事故防止（転倒・転落）」（86%）、感染予防の「隔離」（83.7%）に関する項目及び「栄養指導（76.2%）」であった。50%以上の項目は63項目（63/81=77.8%）、「フィジカルアセスメント」は講義のみの回答で69.8%であった。

2) 卒前に学内演習で習得してほしい項目数は18項目（18/81=22.2%）であった。うち70%を越えた項目数は2項目で、「ベットメイキング」（81.4%）、「リネン交換」（76.6%）であった。

3) 卒前の小児看護学実習で習得する必要があると70%以上の看護師が回答した項目は2項目で、「遊び」（76.7%）と「乳幼児のバイタルサインの測定」（74.4%）であった。50%以上習得してほしいと回答があった項目数は19項目（19/81=23.5%）で全体の2割強であった。一方、小児救急（心肺蘇生、気管内挿管など）に関する技術は、講義（58.1%）による知識レベルの理解でよいという結果であった。

2. 臨床看護師が卒業後の習得でよいと捉える小児看護技術項目

1) 卒後の習得でよいと捉える小児看護技術項目で50%以上の項目数は17項目（17/81=21.1%）で全体の2割であった。内容としては「動脈ラインの管理」（72.1%）、「人工呼吸器の管理」（69.8%）「輸血」（67.4%）、「中心静脈カテーテルの管理」（67.4%）などの「輸液療法」や「救急」に関する項目で高度な技術を要する診療補助技術が挙げられた。また、「入院・退院の取り扱い」、「退院指導」など入退院に関する項目は、卒後教育での技術習得でよいと回答していた。

3. 今回の調査では、臨床看護師の年齢や臨床経験、施設間及び各小児看護技術項目（81項目）間では有意な差は認められなかった。

考 察

1. 臨床看護師は卒前での小児看護学の学内講義で学習すべき必要性の高い技術項目として、「事故防止（転倒・転落）」や感染予防における「隔離」など、「安全」に関する技術項目をあげていた。これは、講義において小児の特徴をふまえ根拠に基づいた「子どもの安全を守る」看護技術を身につける上で重要であると認識していることがわかる。「医療のリスクマネジメントシステム構築に関する研究」³⁾によると「転倒・転落」の事故は15.7%を占め、「注射」に続いて多いと報告されている。近年、学生は日常生活におい

て子どもと接する機会がほとんどなく、危険防止にかかわる意識が希薄である傾向が見受けられる⁴⁾。「安全」については、学生が講義でその重要性を十分認識した上で、さらに実習を通して看護技術が習得できるよう指導していくことが重要であると考え。カリキュラム上限られた時間の中で臨床現場の状況を考慮しつつ、学生には出来る限りの学習機会を調整すること、講義・演習・実習のつながりのある授業構築が教師の力量として大切であると考え。

2. 臨床看護師は卒前の学内演習において、日常生活援助技術の「環境」について技術習得すべき期待が高く、ベットメーキングやリネン交換など、十分な練習が必要である項目を必要と捉えていると推測できる。特に、技術の習得は繰り返し行うことで技術を身につける側面がある。カリキュラム上限られた時間の中で、練習時間の確保など学習機会の調整が課題である。

3. 臨床看護師は臨床実習において、子どもの反応や状況に応じた「遊び」や「観察」の項目について、卒前に習得すべき基礎的な看護技術として高く望んでいることが明らかとなった。

小児看護学実習では、小児の特性や実習時間、安全性の確保などとの関係から、体験する機会が限られる場合も少なくない。したがって、貴重な実習場面を通して何を学ばせるかを明確にし、多角的な視点から知識を統合し効果的な学習ができるように工夫する必要がある。

「安全性」については、今日の医療現場の重要課題の1つであり、小児看護学実習では小児の特性や子どもの反応などをふまえ、常に「安全」を考慮した看護実践が求められている。また「遊び」や「観察」は、実習で習得すべき技術項目と捉えている臨床看護師の割合が高く、これらは、「看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会」による「臨地実習において看護学生が行う看護技術」の水準1（教員や看護師の指導により学生が単独で実施できるもの）の範囲であることや、小児看護学実習で体験可能な技術であることが伺える。

4. 臨床看護師は「入院・退院の取り扱い」や「退院指導」など小児の入院・退院に関する項目を除き、ほとんどの技術項目は50%以上が講義または演習で学ぶべき内容として回答していた。小児の入院・退院については、小児看護学実習期間が短いなど実習期間内の学習機会の調整困難などの要因が影響していると考え。小児看護学では、小児の特徴をふまえた看護技術を身につけることが学習課題であり、限られた時間で

充実した技術教育を行うにあたっては他の看護分野との教育の連携が必要であると考え。

5. 臨床看護師が卒業後の技術習得でよいと捉えている項目は、動脈ラインの管理や輸血、人工呼吸器の管理、小児の心肺蘇生、救急処置、気管内挿管など、「輸液療法」や「救急」に関する項目で、高度な技術を要する診療補助技術を挙げていた。これらは小児の特性や安全性の確保等の観点から、高度な知識や判断に基づく技術習得は困難な場合多く、基礎的な知識での理解でよいと捉えているという実態が明らかとなった。

看護基礎教育における小児看護学では、小児の特徴や個性性を考慮し、かつ“子どもの安全をまもる”ための正確で安全な看護技術の習得が求められている。

研究の限界と今後の課題

今回の調査対象は、A看護短期大学1校における小児看護学実習を実施している3病院小児病棟に勤務する看護師に限定した調査であり、各病院の特色や職場環境に相違があることや対象者数も少ないことから、一般化して結論づけられるものではない。しかし、実際に小児病棟勤務の看護師が看護基礎教育における小児看護学でどのような看護技術を学び、習得すべきと捉えているのか、その実態を明らかにしたことは小児看護技術を検討するための基礎資料として活用できる。今後は、実習病院の状況を考慮しながら、学習効果を高めるための教材研究を遂行すると共に、他の看護分野との技術教育の連携を図り、看護実践能力が高められるような指導方法の検討が今後の課題である。

結 論

臨床看護師が卒前及び卒後に習得すべきと捉える小児看護技術項目を調査した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 臨床看護師の8割は「安全」、「観察」、「遊び」の看護技術は卒前に習得すべきである。
2. 高度な技術や判断を要する診療補助技術（輸液療法や救急）及び入院・退院に関する項目は、卒後の習得でよい。
3. 小児看護学で習得すべき看護技術の精選と臨床及び他の看護分野との技術教育の連携が必要である。

おわりに

今回、臨床看護師が卒前・卒後の基礎看護教育に期待する小児看護技術項目が明らかにすることができ、小児看護学における技術教育内容を検討する際の示唆

表4 臨床看護師が必要と捉えた小児看護技術一覧

n = 43

学習項目		水準 1	水準 2	水準 3	卒業前			卒業後
					講義	演習	実習	
環境調整技術	ペットメーカー	○			△	●	△	△
	環境整備・環境調整	○			△	◎	◎	△
	リネン交換	○			△	●	◎	△
食事援助技術	授乳		○		◎	△	△	△
	離乳食の介助		○		◎	△	△	△
	幼児の食事介助	○			◎	△	△	△
	経管栄養		○		◎	△	△	△
	栄養指導		○		●	△	△	△
排泄援助技術	おむつ交換	○			◎	△	△	△
	採尿・採便			○	◎	△	△	△
	導尿			○	◎	△	△	◎
	浣腸			○	◎	△	△	◎
	幼児の排泄訓練		○		◎	△	△	△
	排泄の介助	○			◎	△	△	△
	人工肛門（ストーマ）			○	◎	△	△	◎
活動・休息 援助技術	睡眠の援助（午睡）		○		◎	△	△	△
	体位変換		○		△	◎	△	△
	安楽な体位		○		△	◎	△	△
	輸送車・車椅子による移送		○		△	◎	△	△
	安静の援助	○			△	◎	△	△
	遊びの援助	○			◎	△	●	△
	学習の援助（学童）	○			◎	△	△	△
清潔・衣生活 援助技術	入浴		○		◎	△	△	△
	清拭		○		△	◎	◎	△
	洗髪		○		△	◎	△	△
	部分浴・殿部浴		○		△	◎	△	△
	口腔ケア		○		△	◎	△	△
	更衣		○		△	△	◎	△
呼吸・循環を 整える技術	酸素療法			○	◎	△	△	△
	口腔・鼻腔吸引			○	◎	△	△	△
	吸入			○	◎	△	◎	△
	タッピング・排痰法			○	◎	△	△	△
	呼吸訓練		○		◎	△	△	△
	経皮酸素飽和度測定		○		◎	△	△	△
	人工呼吸器の管理			○	◎	△	△	△
与薬の技術	内服薬の飲ませ方		○		◎	△	△	△
	坐薬の挿入			○	◎	△	△	△
	薬物の塗布		○		◎	△	△	△
	輸液の管理			○	◎	△	△	△
	針の固定			○	◎	△	△	◎
	シーネの固定			○	◎	△	△	△
	滴数の調節			○	◎	△	△	◎
	輸液量の計算と記録			○	◎	△	△	△
	輸液ポンプの管理			○	◎	△	△	◎
	輸液中の観察			○	◎	△	△	△
	中心静脈カテーテルの管理			○	◎	△	△	◎
	動脈ラインの管理			○	◎	△	△	●
	輸血			○	◎	*	△	◎

学習項目		水準 1	水準 2	水準 3	卒業前			卒業後
					講義	演習	実習	
救命救急	小児の心肺蘇生法			○	◎	△	*	◎
	救急処置			○	◎	△	*	◎
	気管内挿管法			○	◎	△	*	◎
症状・生体機能 管理技術	乳幼児の体温測定	○			◎	△	●	*
	〃 脈拍測定	○			◎	△	●	*
	〃 呼吸測定	○			◎	△	●	*
	〃 血圧測定	○			◎	△	●	*
フィジカルアセ スメント技術	乳幼児の体重測定		○		◎	◎	△	△
	〃 身長測定		○		◎	◎	◎	△
	〃 頭囲測定		○		◎	◎	◎	△
	〃 胸囲測定		○		◎	◎	◎	△
	フィジカルアセスメント		○		◎	△	△	△
感染予防の技術	手洗い	○			◎	△	△	△
	感染性廃棄物の取り扱い	○			◎	△	△	△
	隔離（感染予防策）			○	●	△	△	△
	低出生体重児の看護			○	△	△	△	△
	保育器の取り扱い			○	△	△	△	△
	予防接種			○	△	△	△	△
安全管理の技術	事故防止（転倒・転落）	○			●	△	△	△
	療養生活の安全確保	○			◎	△	△	△
安楽確保の技術	冷罎法・温罎法	○			△	◎	△	△
	固定・抑制		○		◎	△	△	△
	採血・注射の介助			○	◎	△	△	△
	診察の介助		○		◎	△	◎	△
	検査の介助		○		◎	△	◎	△
	腰椎穿刺の介助			○	◎	△	△	△
	骨髄穿刺の介助			○	◎	△	△	△
	睡眠剤使用の検査			○	◎	△	△	◎
	光線療法			○	◎	△	◎	△
	患児・家族への対応		○		△	△	△	△
その他	入院の取り扱い			○	△	△	△	◎
	退院の取り扱い			○	△	△	△	◎
	退院指導			○	△	△	△	◎

注釈）「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」2002 年3月の資料に一部加筆。

水準1：教員や看護師の助言・指導により学生が単独で実施できるもの

水準2：教員や看護師の指導・監督のもとで実施できるもの

水準3：原則として看護師や医師の実施を見学するもの

備考： ●印：70 %以上 ◎印：50 %以上 70 %未満 △印 1 %以上 50 %未満 *印：0 %

が得られた。看護の資質の向上が求められている今日、現代社会や臨床側が求めている看護実践能力の高い学生を育てることを目標に、今後はこの結果を活用し小児看護学で習得すべき看護技術内容の精選及び到達目標の検討及び、臨床と連携した指導に取り組んで行きたい。

なお本研究は、第24回日本看護科学学会で発表したものに一部加筆・修正したものであり、千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター「平成15年度プロジェクト研究」の一部である。

引用文献

- 1) 井部俊子：看護師の卒後臨床研修はなぜ必要か.看護展望, 26 (5) :17-22, 2001.
- 2) 厚生労働省：看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会報告書. 2003.
- 3) 川村治子：医療のリスクマネジメントシステム構築に関する研究.厚生科学研究費補助金健康安全確保研究分野. 医療技術評価研究事業, 1999.
- 4) 仁尾かおり, 駒松仁子, 柏木公一：小児看護学実習における「子どもの安全を守る」教育「転倒・転落の事故防止」の教材開発と学習効果. 国立看護大学校研究紀要, 14 (1) :43-52, 2005.

Pediatric Nursing Techniques in the Nursing Education from the View of Nurses

Chiharu Nishiyama, Ritsuko Ohmuro*, Yoshiko Suzuki**, Noriko Goda***

*Center for Education and Research in Nursing Practice, School of Nursing, Chiba University

**Ayase-Nishi Kanagawa Prefectural High School

***Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Okayama University Medical School

Abstract

The aim of this study is to determine the skills needed for pediatric nursing that clinical nurses consider as essential to master in the fundamental nursing education program before and after the graduation. We surveyed anonymous questionnaire about the items for nursing skills, that must be acquired before (lectures, exercises, and practicum) and after the graduation, to the nurses working at pediatric ward in three different hospitals. The questionnaires were distributed to each ward, collected by mail individually, and 43 responses (collection rate: 89.6%) were obtained. The findings identified that the nurses considered "safety", "recreation", "observation" as the essential items of skills that must be mastered before the graduation, and advanced skills needed for the medical assistant such as "fluid infusion therapy", "emergency care" as the techniques that can be learned in the education after the graduation.

Keywords: Nurse, Nursing education, Pediatric nursing techniques